



## 【役員名簿(2017年6月現在)】(五十音順)

代表：結城 正美 (金沢大学)  
副代表：小谷 一明 (新潟県立大学)  
顧問：上遠 恵子 (レイチェル・カーソン日本協会)  
西村 頼男 (阪南大学名誉教授)  
事務局長：高橋 綾子 (長岡技術科学大学)  
事務局補佐：  
辻 和彦 (近畿大学)  
浜本 隆三 (福井県立大学)  
会計：大野 美砂 (東京海洋大学)  
河野 千絵 (日本大学・非)  
監事：村上 清敏 (金沢大学名誉教授)  
ニュースレター編集委員：  
浅井 千晶 (千里金蘭大学)  
豊里 真弓 (札幌大学)  
白山 岳人 (和歌山大学・非)  
会誌編集委員：  
Bruce Allen (清泉女子大学)  
黒崎 真由美 (関東学院大学)  
塩塚 秀一郎 (京都大学)  
芳賀 浩一 (城西国際大学)  
波戸岡 景太 (明治大学)  
コンピューターセンター：  
岩政 伸治 (白百合女子大学)  
北国 伸隆 (長崎外国語大学)  
山城 新 (琉球大学)  
評議員：相原 優子 (武蔵野美術大学)  
池田 志郎 (熊本大学)  
石幡 直樹 (東北大学)  
太田 雅孝 (大東文化大学)  
上岡 克己 (高知大学名誉教授)  
茅野 佳子 (日本大学・非)  
塩田 弘 (広島修道大学)  
管 啓次郎 (明治大学)  
高橋 龍夫 (専修大学)  
高橋 勤 (九州大学)  
高橋 昌子  
巽 孝之 (慶応義塾大学)  
中川 僚子 (聖心女子大学)  
林 直生 (滋賀大学)  
平塚 博子 (日本大学)  
横田 由理 (大東文化大学・非)  
吉田 美津 (松山大学)  
院生代表：戸谷 洋志 (大阪大学・特)  
広報：喜納 育江 (琉球大学)  
塚田 幸光 (関西学院大学)  
松永 京子 (神戸市外国語大学)  
研究助成：岡島 成行 (青森山田学園)  
管 啓次郎 (明治大学)  
乳井 昌史 (早稲田大学)  
野田 研一 (立教大学名誉教授)  
山里 勝己 (名桜大学)  
結城 正美 (代表)

## 戦争と野生

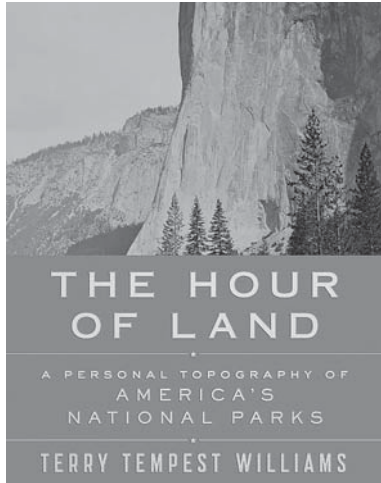
代表 結城 正美 (金沢大学)

テリー・テンペスト・ウィリアムスが来日した1994年の春、私は金沢と広島でこの作家と会う機会に恵まれた。金沢では、当時読売新聞社の環境ジャーナリストとして活躍しておられた岡島成行氏(現・青森山田学園理事長)のご尽力により、ウィリアムス氏と日野啓三氏の講演会が開かれた。家郷ユタ州の荒野から持参したセージの束を持って登壇したウィリアムスの力強くも温かい共感の世界に引き込まれたことをよく覚えている。金沢での講演会后、ウィリアムスは自らの強い希望で広島へ向かったのだが、奇遇にも同時期に広島へ引越した私は、再び会合や散策に参加することができた。広島大学の伊藤詔子教授(現・名誉教授)の研究室で十数名の研究者を前に、作品研究よりも、作品を読んで何を感じたのか、自分自身のどういう物語と共振したのかということを知りたい、と語ったウィリアムスの言葉はその後も耳に残っている。共感(empathy)は、ウィリアムスの文学実践や環境運動に一貫して使われる言葉で、この書き手の思想の核を成す。ウィリアムスのいう共感は、人間同士の関係に限定されるものではなく、レオポルド的な大地のコミュニティに敷衍されるべきもので、人間社会と野生をつなぐ意味合いをもつ。そういえば、ウィリアムスは滞日中ヘンリー・ソローの豆本を持ち歩いていて、言うまでもなく、ソローはきわめて独創的に野生と向き合った思想家である。

ウィリアムスの作品にはソローの声が響いているが、新作*The Hour of Land: A Personal Topography of America's National Parks* (2016)も例外ではない。副題が示すとおり、この本のテーマはアメリカの国立公園。去年はアメリカ国立公園局設立100周年にあたり、出版にはそれを祝う意味も込められていたのだろう。ただしオメデタイ祝福ムードはない。戦争の絶えない、あるいは新種の戦争が作られつつある現代において、国立公園に体现される「野生」なるものがいかに必要であるか、ということが語られた書である。

そもそもアメリカの国立公園は戦争の恐怖を通して幻視されたヴィジョンであった、というところからこの本は始まる。1864年にリンカーン大統領がヨセミテ保護に署名した(これによって誕生したヨセミテ州立公園は1890年に敷地を拡大して国立公園となった)背景には、国を二分した南北戦争の傷を癒し、分裂した国民に統合的平和をもたらすことへの希望が込められていたという。人々の「分裂」——アメリカ合衆国に限らず、この状況は世界各地で現在もみられる。分裂には争いが伴う。戦争ではなく平和を実現するために

は新たな物語、新たな倫理が必要であり、そこに近づくためには人間社会の論理から一旦外れて人間を客観的にみる視角が不可欠で、それを可能にするのが「野生」である。このように戦争の論理を乗り越える拠りどころとして野生を強調するウィリアムスの文学実践は、ソローの市民的不服従 (civil disobedience) の伝統を継承しつつ、それを「野生への従順 (wild obedience)」という形で発展的に翻案する試みであるように私には思える。



野生——この言葉は、そう遠くない将来、死語になってしまうのだろうか。

「人新世 (アントロポセン)」において「野生」は消滅した、という見解を少なからず目にする。文字通り「人類 (Anthropo)」の影響が全地球に及んでいる新たな地質時代を指す人新世は、今世紀に入って急速に広まった概念であり、まだ地質時代として公式に採用されていないものの、気候変動をはじめとする現代の諸問題を論ずる際に必ずと言ってよいほど使われる言葉である。地球の隅々にまで人間の活動が影響しているのだから、もはや野生の存在する場はない、という考え方はわからないでもないが、どこか引っかかる。工場の有毒な煙や排水、車や航空機の排気ガス、化学兵器の毒性化学物質をはじめ、人間の諸活動に由来する有害物質や影響が地球全体に行き渡っていることが事実だとしても、それを野生の不在につなげる論理にはある種の傲慢さが感じられてならない。現代社会は野生を過小評価してはいないだろうか、と。

野生にたいする現代社会の見方を考える上で、少し前に物議を醸した子供用辞書の改訂をめぐる議論が参考になるだろう。The Guardian (13 January 2015)によれば、7～9歳児を対象とした400語を収録するOxford Junior Dictionaryが改訂に際してコンピュータ関連語を追加し、代わりに自然環境に関わる言葉を削除した。追加されたのは、“analogue,” “broadband,” “blog,” “chatroom,” “cut-and-paste”をはじめとする現

代の日常語。他方、削除された言葉には、heron (サギ), herring (ニシン), kingfisher (カワセミ), lark (ヒバリ), leopard (ヒョウ), magpie (カササギ), newt (イモリ), otter (カワウソ), panther (ピューマ)等が含まれていた。使用頻度の高さを基準とする言葉の選定は、スクリーンの前で過ごす時間が多いう子供の現実を反映したものだが、改訂に抗議したマーガレット・アトウッドをはじめとする28人の作家は、戸外で遊ぶ時間の減少と子供の身体的・精神的問題の増加の相関性が考慮されていないと指摘し、自然関連語の削除は生命に直ちに危険をもたらすものではないものの、権威ある辞書の責任として文化のあり方を考えるよう要請した。

かつて子供たちは「A」はacorn (ドングリ)の「A」、 「B」はbuttercup (キンポウゲ)の「B」、 「C」はconker (トチの実)の「C」と口ずさみながら言葉を覚えたが、それが「A」はattachment、「B」はblog、「C」はchatroomに変わりつつある——上述の論争をめぐる記事で紹介されている内容を日本語にしなから、はたと気づいた。attachment、blog、chatroomは日本語にしなくてもわかるのだ。これは何を意味するのだろうか。ITのグローバルな普及によって土地固有の言葉がなくなりつつある、ということなのか。あるいはより大局的に、ある強力な論理の覇権を示すものなのか。いずれにせよ、アタッチメントもブログもチャットルームも、人間だけの閉じた世界と関わる言葉であり、人間中心主義を猛進＝盲信する社会のあり方を反映している。

人類の新たな時代だからこそ、人新世をめぐる議論では「人間」について考えることが求められる。人間の影響が地球に限なくみられるから野生がなくなった、というのではなく、そう考える人間の価値観自体を問わねばならないのではないか。今福龍太『ヘンリー・ソロー——野生の学舎』(2016年)を読みながら、改めてそのような認識を強めた。今福の言葉を引こう。

[ソローは]野生と栽培、自然と文明、物質と精神といった単純な二元論的な構図を飛び越える……。飼い馴らされていないこと、耕されていないこと。それはたしかに譲ることのできない野生の本質の特徴ではあったが、逆に人間は、飼い馴らし、耕すことによって生まれた文明の発明者として、野生の保持にたいしてより重大な責務を負うのだった。野生にたいして鋭敏でありつづけること。人間が、自らの冒した自然にたいして真摯であるためには、自覚的なかたちで「野生」への信頼を文明のなかにふたたび喚び出さねばならないのである。

野生の不在などという主張がまかり通るとすれば、それは「自らの冒した自然にたいして真摯で」なくなった証左にほかならない。人類の新たな時代には野生が不可欠である。

## 【開催のお知らせ】

## 2017年度ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会 (2017年8月24日[木]~25日[金]@清泉女子大学[東京都品川区])

大会実行委員長 ブルース・アレン(清泉女子大学)  
大会実行委員 相原 優子(武蔵野美術大学)

今年度の全国大会は、4年ぶりに東京で開催されます。参加を検討されている会員の方々も多いのではないのでしょうか。大会実行委員会のブルース・アレンさんと相原優子さんに、プログラムのみどころや会場の魅力について語って頂きました。

今年で第23回目を数えます全国大会は、8月24日(木)と25日(金)に東京の五反田にある清泉女子大学に於いて開催されます。今回は例年とは違い、夏期休暇中の平日に開催致します。多くの方々には是非ご参加頂きたく思っております。今年度も、多種多様な観点とテーマから「環境」と「文学」を見つめるラインナップとなっております。

今回はまず二つの素晴らしい基調講演を企画しております。第一日目には、東京開催に相応しく「日本古典と〈環境文学〉」というテーマで、「江戸文学」の第一人者である渡辺憲司氏(自由学園最高学部長・立教大学名誉教授)と中世日本文学がご専門の小峯和明氏(立教大学名誉教授)によるトーク・セッション形式のご講演が企画されております。司会は野田研一氏(立教大学名誉教授)に務めて頂きます。第二日目には、「原発」「食」「環境」というテーマを取り入れながら精力的な執筆活動を展開されている作家の田口ランディ氏にご講演頂きます。司会は本学会代表である結城正美氏が務めて下さいます。これらの大変贅沢で刺激的な二つの基調講演は、参加者に、文学作品と「環境」を巡る「過去」と「現在」を考えるきっかけを与え、「未来」に思いを馳せる貴重な機会を提供してくれるものと確信しております。

また、山積する環境問題の解決法を探るために、市民と研究者をつなぐ「社会コミュニケーション」の観点からの取り組みのご報告を交えたラウンドテーブルの計画も進んでおります。毎年恒例となりました「院生企画」と致しましては、大学院生メンバー達による意欲的な「動物(へ)の変身」をテーマとしたブックレビューが予定されております。大学院生らしい瑞々しい感性で選ばれた様々な作品が紹介され、論じられることと思えます。また、二日間にわたって行われる六つの個人発表のテーマも日本文学、ヨーロッパ文学、イギリス文学、アメリカ文学、環境思想、と多岐にわたっております。扱う作品や思想の文化背景や年代やジャンルに於いてもバラエティ豊かなものとなっております。多角的な視点で「文学と環境」が論じられることと思えます。是非ともフロアから、多くのご質問やレスポンスを頂ければと思っております。

今年最大の特徴を挙げるとすれば東京、五反田の清

泉女子大学に於いて開催されるという一点に尽きるかもしれません。商業ビルの建ち並ぶ五反田の街中でありながら、高台にあって緑に囲まれた清泉女子大学のキャンパスは、まさに異空間とも言えるスポットです。「アーバン・ネイチャー(urban nature)」という概念を再考するに相応しい場所ではないかと思われまます。参加者の皆様には、生き活きとした都会の鼓動と自然の静寂との絶妙なバランスとコントラストの中に身を置いて頂き、改めて「都会」と「自然」について、そして「遠くにあるexoticな自然」ではなく、「身近にある自然」について思いを深めて頂くことの出来る絶好の機会かと思われまます。

懇親会は、清泉女子大学から歩いてすぐのところにありますイタリアン・レストラン「トラットリア・アリエッタ」で開催の予定です。都会らしい雰囲気のお店ですが、テラスもあり、開放的な空間での懇親会になるかと思えます。是非多くの方々にご出席頂き、五反田の夜と歓談を楽しんで頂ければと思えます。こちらの出席につきましては、人数把握のために、大会関連書類として同封されます「参加申込書」を、7月末までにご提出頂ければと思っております。

例年、本学会の大会の目玉としてエクスカージョンがスケジュールに盛り込まれておりますが、今回は例年のものとはちょっと趣向を変え「エクスカージョン」の代わりに、Urban Nature Watchingという企画を考えております。清泉女子大学の構内は東京都指定有形文化財に指定された洋館「旧島津公爵邸」を有しているだけでなく、豊かな緑の庭園をも備えております。この企画は、会場となっております清泉女子大学のキャンパスを「watch and reflect(観察と内省)」をもって、大いに堪能して頂くという、お気軽にご参加頂ける形式のものです。涼しい(であろう!?)午前中に予定しておりますので、是非奮ってご参加下さい。

大会の企画・運営には全く不慣れな大会実行委員の私達ではございますが、精一杯準備を進めて参る所存です。とは言え、予期せぬ出来事や不手際も多々あるかと、今から戦々恐々としております。(先に謝らせて頂きますが)その節は、どうかご容赦下さいませ。皆様を東京にお迎えするのを楽しみにしております!是非、奮ってのご参加をお待ち申し上げます!

## 【アジアのエコクリティシズム】

## 広東外語外貿大学中日比較生態文学研究所の目指すところ

研究所所長 楊 曉輝(ヨウ・ギョウキ)

昨年のASLE-ASEAN設立やISLE-EAシンポジウムの開催など、アジアの近隣諸国での環境文学研究が盛んになってきています。ASLE-J会員でもある広東外語外貿大学の楊曉輝さんに、中国におけるエコクリティシズムおよび同大の中日比較生態文学研究所についてご寄稿頂きました。

急速な経済発展に伴い、中国では、様々な環境問題、公害問題が顕在化し、その深刻化と被害の拡大が指摘されています。水俣病、四日市喘息、足尾鉍毒事件のような、かつて日本が経験した凄まじいばかりの環境破壊・公害問題が、現在の中国で起こっています。言い換えれば、中国は、日本の公害・環境問題の歴史をまさに今、経験しようとしているのです。

環境問題は、今や世界的規模の問題であり、世界的な視野で考えない限り解決できません。また、従来の科学や経済、政治などの視点だけでは、それらに取り組むには不十分です。人間と自然の関係を多角的に捉えるために、環境研究のジャーナルである生態文学(環境文学)の視点から人間と自然のあり方を探るのが有効な手段のひとつでしょう。

エコクリティシズムが1990年代にアメリカから中国に紹介されてから、もう30年近く経ちました。この30年間、中国では、欧米あるいは中国本土の環境文学を中心に研究が進められてきました。一方で、日本をはじめ周辺部の東アジア諸国の文学に関する研究は盛んに行われてきたものの、残念ながら、日本の環境文学については、研究はおろか、翻訳さえも殆ど進められていませんでした(現在、有吉佐和子の『複合汚染』など少数の作品の中国語版があります)。

公害、原発事故を含む環境問題を扱っている環境文学作品が日本には数多くあり、多くの作家が人間と自然の関係がどうあるべきかということを作品の中で取り上げています。それらの作品は、中国の環境問題を省みる際により参考になりますし、中国の環境文学作家の創作活動及び中国のエコクリティシズム研究にもより良い刺激を与えるものにもなると思われまます。

以上のような見地から、広東外語外貿大学中日比較生態文学研究所は、日本生態文学及び中日比較生態文学に関する研究・実践を促進し、学術領域の進歩発展に寄与することを目的として、2016年5月30日に発足しました。本研究所は中国と日本両国の生態文学の多様性にエコクリティシズムの視点からアプローチし、また、国内外の研究ネットワークの構築、成果の公表、若手研究者の育成等を目指します。

以下が当研究所の活動内容です。

- a) 中日生態文学に関する研究会・講演会・国際シンポジウムの開催。
- b) 日本生態文学作品及びその研究に関する翻訳

と紹介。

- c) 日本生態文学及び中日比較生態文学に関する研究成果の発表(学術論文、著作、論文集等)。
- d) 共同研究や研修・セミナー等を通じた次世代研究者の養成。

設立初年度の2016年10月には、初主催の「日本生態文学研究国際シンポジウム」に野田研一氏と結城正美氏をお招きし、「失われる他者の時間」と「汚染と家郷—水俣、チェルノブイリ、福島」というタイトルのすばらしいご講演をしていただき、大きな反響がありました。シンポジウムの後、『日本生態文学前沿理論研究』の発行式も挙行いたしました。

当研究所は英米の環境文学研究者との交流もありますが、日本の環境文学研究を中心として学術活動を行っています。比較文学研究の一環としての環境文学の研究は異国間で行うことが中国では望まれており、中日比較生態文学に関する研究の発展が期待されています。

中日比較生態文学研究所はASLE-Japan / 文学・環境学会メンバーの学術成果の紹介、日本の環境文学作品の翻訳、中日環境文学の比較に関する研究などを今後の予定活動とします。ASLE-J会員の皆様のご支援、ご協力をいただければありがたいと存じます。



楊曉輝氏プロフィール：

広東外語外貿大学教授。日本生態文学(環境文学)、エコクリティシズムを専門とし、文学や翻訳に関する研究活動を精力的に進めている。中国国家社会科学基金一般プロジェクト等の採択歴があり、主な著書や論文は、『日本文学の生態閑照』(上海外語教育出版社、2017年)、「原発と日本文学」(『外国文学動態』2014年)、「日本作家の非“被爆”体験を基にした“核”創作：「黒い雨」と「西海原子力発電所」を例として」(『浙江工商大学学报』2015年)、「越境する場所：『有吉佐和子の中国レポート』に見る中国の環境問題に関する文学的思考」(『鄱陽湖学刊』2014年)ほか多数ある。

## 【学会報告】

# 第5回ISLE-EA (International Symposium on Literature and Environment in East Asia) シンポジウム報告

(東國大学[韓国]), Nov. 5-6, 2016)

川谷 弘子(中央大学・非) / 瀬川 久志(東海学園大学)

昨秋、韓国のソウルにおいてISLE-EAシンポジウムがおこなわれました。3年前の沖縄開催の時と同様に、本学会の会員の方々も多数参加されました。東アジアにおける環境人文学研究の「共同体」への参画は、今後も意義深いものとなるのではないのでしょうか。お二人の会員の方にご報告して頂きました。

今大会は、開催テーマ“International Symposium on Sustainable Urban Forest and Environmental Humanities: Global Vision, Adaptation-Green Welfare, and Future Education”に象徴されるように国際的で、学際的なシンポジウムであった。Catherine Rigby氏(Bath Spa University)による基調講演では、様々な地域で宗教が道徳規範や文化形成に深く関わってきた歴史が提示され、個々の宗教の枠を超えた宗教心というものが、危機的状況にある環境問題を解決する新たな規範を作り出す可能性が示された。次の基調講演では、Seoul Foundation for Art and Culture代表のChul-hwan Ju氏によって、ソウルのオアシス南山が市民の憩いの場として、市の環境保全の場として機能していることが紹介された。

研究発表は英語によるセッションと韓国語によるセッションに分けられ、私は、ブルース・アレン氏(清泉女子大学)の進行による“Environmental Humanities: Anthropocene, Glocalism, Ecocriticism”を拝聴した。Yalan Chang氏(Huafan大学)はTerry Tempest Williamsの*Refuge*を取り上げ、化学に支配された「アントロポセン」の時代において女性の身体と大地がじわじわと毒されていく様を明かすとともに、救貧院の勤務医としての体験をもとに描かれたVictoria Sweetの*God's Hotel*における前近代的療法“slow medicine”に救いの道を探る。他にKaren Yamashitaを取り上げてマジックリアリズムの可能性を探る発表、異なる角度から海洋を扱った二人の台湾人作家、Syaman RaponganとMig-yi Wuを比較、分析し、文化と科学的見地双方からの海洋保全の取り組みの可能性を探る発表、生物学者E. O. Wilsonの見解を示し、ヒトに起因する「アントロポセン」の危機回避の鍵はヒトにあるとする発表があり、学際的な視点による環境問題解決に希望を見出せる充実した内容であった。

(川谷弘子)

ついて、多少立ち入って報告したいと思います。私は「文学の背景に描かれた中世及び現代の風車」というテーマで発表しました。内容は「ドン・キホーテ」に始まり、風車を扱った現代のメディアやアートに至る多様でエコロジカルな作品群です。中世の農耕の最先端技術としての風車の持つ文学性を現代に再考したいというのが意図でした。

もうお一人は、台湾の崇実(スンシル)大学のKyu-ick Choさんの「中世李氏朝鮮の儀式における雩祀および雩祀楽章の環境的意味合い」という、非常に興味深い内容に関するものでした。李氏朝鮮は1392年から1910年にかけて、朝鮮半島に存在した国家です。朝鮮民族国家の最後の王朝で、現在までのところ朝鮮半島における最後の統一国家です。雩祀(Usa)とは雨の儀式のことで、Kyu-ick Choさんの報告は、五穀豊穡を願って伝統的に行われている、伝統文化に関するものでした。筆者の報告が風エネルギーを穀物の脱穀や地下水のくみ上げに使用された中世の風車に関するものであったので、雨の儀式の現代的な意義を再考するChoさんの報告とうまくかみ合っていたように思います。

最後のお一人は、台湾の国立台北技術大学のJu-ying Huangさんの「エコロジカルな旅行としてのヒーローの冒険：オデュッセウスの放浪」です。オデュッセウスは言うまでもなくギリシア神話の英雄で、イタケーの王(バシレウス)であり、ホメーロスの叙事詩『オデュッセイア』の主人公です。Huangさんの報告もまた「オデュッセウスの冒険の意義をエゴ・セントリックな観点からエコ・セントリックなそれへパラダイム転換を図り、エコロジカルな展望をもって再検証する」というもので、中世の教訓を現代に生かそうとするものでした。セッションでの質疑応答の詳細を紹介するスペースはありませんが、短い時間の中で、過去の人々の営みや古典の中に埋もれたメッセージを丹念に掘り起こし、現代に生かしていくエコクリティシズムの意義を確認できたことは大きな成果でした。

(瀬川久志)

私は大会2日目のSession 1-2「いにしへの知恵(過去の環境読本)」に参加したので、このセッションに

## 【ご著書紹介】

野田研一・山本洋平・森田系太郎（編著）

## 『環境人文学Ⅰ—文化のなかの自然』『環境人文学Ⅱ—他者としての自然』

（勉誠出版、2017年5月）

本邦初の環境人文学の書物が出た。

いや、ようやく出すことができた、と言った方が正確かもしれない。当初の刊行予定から、さらに1年かかって出版された『環境人文学Ⅰ・Ⅱ』は、環境人文学の議論を日本でさらに活性化することを意図して編まれた。〈環境人文学〉は、「多様性の内包」というエコクリティシズムの指向性を軸に確立された新たな学問領域である。したがって本書でも、人文学領域で環境研究を実践する（先取的な！）国内外の研究者陣による論考のみならず、日本を代表する環境文学作家のインタビュー・鼎談・講演録など、多様な書き手による多様な書き物を収載した。「難産」となったのは、この多様性がゆえに編集に思った以上に時間がかかったためである。

第一巻のテーマは「文化のなかの自然」。「人間は自然をどのように捉え、描いてきたか」（帯より）という観点から編まれている。一方、第二巻のテーマは「他者としての自然」で、「動物、森、死者、サイボーグ

……〈他者〉をどのように捉え、描くのか」（帯より）という視点で編集した。

すでにお目通しいただいた方からは、「生産的な学問領域に特有な熱気のようなものを感じます」「手にとって頁をめくると、脳みそが喜ぶワクワク感が溢れてきます。……文学や哲学は、しなやかに人類を未来に連れて行ってくれる気がします」といったコメントを頂いている。各論考が有機的に結びついて醸成される本書全体の雰囲気は卓抜に言い当てられている。

また、本書には隠れたアジェンダもある。これについては、両巻の「おわりに」を参照してほしい。

最後に、これからお手に取って読んでくださる皆さんに向けて、編者の一人である山本洋平氏による、「はじめに」（第二巻）の結びの言葉を引用して締めくくりたい。——「それでは良い航海を。本書が、専門家のみならず、できる限り多くの読者に届き、環境人文学の知の潮風に触れる旅路になることを心から願いつつ。」（森田系太郎 [在野研究者、会議通訳者]）

## 【ASLE-J-Grad Journal (院生組織だより)】

## 院生組織読書会の報告

青田 麻未(東京大学・院)

院生組織では去る2月25日、立教大学池袋キャンパスにて、著者・野田研一氏をお招きして『失われるのは、ほくらのほうだ——自然・沈黙・他者』（水声社、2016年）について読書会を行った。山田悠介をオーガナイザーとし、笠間悠貴、高橋実紗子、三宅由夏、青田麻未の4名がそれぞれの専門領域の観点から話題提供を行ったうえで、野田氏の応答および全体でのディスカッションを行うという形式で会は進められた。

様々な話題が飛び交う濃密な時間であったが、参加者の主な関心は野田氏の言う「他者」に向かっていたと言えるだろう。野田氏は同書において、根源的な他者とはわれわれの前で沈黙しているものであるとしたうえで、そのような他者としての自然とわれわれとの交感の道を探る。ここで言う沈黙とは、人間の用いる言語とは別の仕方、可感的なものとしてわれわれに迫ってくることを意味する。そのような他者とはいかなるものなのか、またわれわれはなぜ自然を他者とみなすべきなのか——このような大きな問いを惹起する

力が、同書にはある。

これらの疑問をめぐる野田氏の丁寧な応答のなかでも、とりわけわたしが興味深く思うのは、「擬人化」である。自然の擬人化はしばしば悪しきものとみなされるが、野田氏の語りからは、一方向に収斂しない擬人化、すなわちわれわれと自然とのあいだの共感関係を担保し、われわれの根源として自然を措定する可能性を拓くものとしての擬人化の姿が見えた。この擬人化は、言語を媒介としない点で、自然と共感しながらしかしなお自然を沈黙する他者であるとみなすことを可能にする。それゆえ、われわれと交感できる他者というアンビバレンスな存在について考える際の鍵となるのだ。

最後になるが、院生からの読書会の提案をご快諾くださり、長時間にわたりわれわれの疑問に真摯に応答してくださった野田先生に、心からのお礼を申し上げます。

## 【シリーズエッセイ 風景のカタチ(2)】

## Gene's Yard

辻 梨花(University of North Texas・院)

2015年の夏からフルブライト奨学生として、北テキサス大学の哲学科に博士留学をはじめから今年で約2年が経つ。大学が所在するデントン市は、近郊のガラスとは違って発展途上な小さな大学街である。街の中心地の風景は、比較的に大きな家と短く刈られてある芝生が印象的だ。また、芝刈りをしている人の姿が日常の風景の一部になっている。この2年間の中で違う街や他の州を訪れることもあったが、刈られていない芝の庭を見たことがない——ある一軒の家を除いて。

それは、*Environmental Ethics* ジャーナルの創始者また現役編集者である、ユージーン・ハーグローブ博士の家である。彼は私のアドバイザーであり、また良き友人でもある。彼の庭は、「こんなに草や花が伸び放題なのは誰も住んでいないからのか」と勘違いする人がいるぐらい、異質である。彼の周り近所は、この街の規範通りの統一された芝生をもち、それがかえってハーグローブ博士の庭を際立たせている。アメリカの居住地では当たり前なことなのだが、各自治体の取り決めに従わず、芝がある一定の長さ以上に伸びると罰金を支払わなければならないケースがある。実際、ハーグローブ博士自身も、14年間に渡りデントン市や周り近所と芝刈りのことを巡り、争った経験がある。

なぜ芝を刈らなければいけないのか？それは、居住区の美化活動と関係があり、美しく景観を守ることによって、治安、また土地の値段を保つことが目的とされている。ようは、多くのアメリカの人々は、短く刈られた芝生が美しいと考えている。よって、土地固有の種ではない芝を植える必要が生まれ、また固有種でないがゆえに膨大な維持費と水が必要になるのである。それにもかかわらず、芝生付きの家をもつことに憧れをもつ人が多いと感じる。この土地の人々が美しいと思える自然風景が、この街の風景の規範を作り、その規範がまた人々の美的価値に影響を与え均一化された風景を作り出している。

では反対に、なぜハーグローブ博士は芝刈りをしないのか？それはこの土地が本来プレーリー（大草原）であったことを知っているからである。彼の土地はアメリカンフットボールコートと同じぐらいの面積があり、デントン市が存在する前の入植者（1850年頃）がもともと所有していたもので、1993年頃に買い取ったものである。購入時には、入植前の面影が少し残っており、固有種の草花が生えていたそうである。その当時の近隣の方に、「芝刈りをして花をだめにしないで」と言われたそうだが、それもそのはず、プレーリーを刈り、外来種を植え、放牧し続けたこの街では、入植前を彷彿させるような自然風景が残されていない。実

際に、私もハーグローブ博士から話を聞くまでは、この街はもともと砂地でプレーリーに覆われていたことなど知る余地もなかった。彼は、その事実を知り、野生の草花を保護するために芝刈りをあえてしていない。またその成果あってか、コヨーテやキツネなどの約20種近い野生動物たちが彼の庭を訪れている。



この写真は2017年4月23日に竹の伐採を手伝いに訪れた際に、撮ったものです。ハーグローブ博士と彼の家と表の庭。庭には、Winecupと呼ばれるワイングラスの形に似たテキサス固有種の赤い花が咲いています。

単に放置しているだけのように聞こえるかもしれないが、そう簡単なものではない。この街に様々な形で持ち込まれた外来種が固有種の草花を脅かしているからである。例えば、竹やスイカズラ（Japanese honeysucklesと呼ばれている）が侵食を始めており、頻繁に伐採しなければ野生の草花を維持できない状況である。また、他の人が芝刈りを突然やめたからといって、固有種の草花が生えてくるということはないに等しいと、ハーグローブ博士は言う。なぜならば、外来種、長期の刈り続け、野火や野焼きがないことなど、様々な要因が自生を難しくしているからである。

幸いにも、Wildflower Exemptionという野生の草花が生えている場合は刈らなくてもいいという条例が存在するが、それはあくまでexemption(免除)であり、芝刈りをするのが前提で、野生の草花の保護義務などはない。人々が好む自然景観が、必ずしもその土地の固有種の保存につながるような規範を作り出しているとは限らない。均一化された庭を作り出すその規範は、種の均一化を進め、種の多様性を損なわせる。ハーグローブ博士の「異質な庭」が忘れられた土地の風景の再発見を誘う。

## 事務局より

■2017年度ASLE-Japan／文学・環境学会  
第一回役員会・総会のご報告

平成29年5月28日(日)金沢大学サテライト・プラザ2階講義室(〒920-0913 金沢市西町三番丁16番地)において第1回役員会が開かれました。まず、審議事項として、2016年度会計報告および監査報告、2017年度予算案が提案され審議の結果、承認されました。また、一部役員改選案、全国大会案、執筆者分担金についての内規、会費未納者対応が審議を経て了承されました。続いて、ニューズレターの発行、会誌20号の進捗状況、現会員数(193名)、院生組織の活動、以上の報告がありました。役員会の後、例会である放射性廃棄物の地層処分に関する勉強会が行われました。名古屋大学博物館・大学院環境学研究所の吉田栄一氏より「高レベル放射性廃棄物の地層処分(地層処分の仕組み・技術的背景そして日本の地下環境について)」、原子力発電環境整備機構地域交流部の加来謙一氏より「地層処分事業および諸外国情報について」のご講演の後、質疑応答が行われました。日本原子力文化財団の内藤陽介氏、経済産業省資源エネルギー庁の小神知夏子氏もご臨席くださりました。参加人数は非会員も含め20名となりました。

■2017年度ASLE-Japan／文学・環境学会  
全国大会開催のお知らせ

と き：2017年8月24日(木)～25日(金)  
と ころ：清泉女子大学  
(〒141-0022 東京都品川区東五反田3丁目16-21)  
会員の皆様の多数のご出席をお待ちしております。

## &lt;会費納入のお願い&gt;

2017年度の年会費(一般5,000円、学生2,000円)の納入をお願いいたします。

ゆうちょ銀行  
口座番号 01300-0-93821  
加入者名 文学環境学会  
(フリガナ：ブンガクカンキョウガクカイ)

## &lt;終身会員制度をご活用ください&gt;

「終身会員制度」につきましては、本学会ウェブサイトの入会案内にも掲載しています。現在、8名の先生方が終身会員となっております。是非とも終身会員制度をご活用いただき、本学会に末永くご指導賜りますようお願い申し上げます。

## &lt;会員情報の訂正・更新について&gt;

会員の皆様にお願ひして参りましたが、連絡先住所、電話番号、メールアドレスに変更がありましたら、すみやかに事務局補佐・辻(twain1910★gmail.com)までご連絡ください。ご協力の程、よろしくお願ひ申し上げます。

## ..... 広報より .....

広報では、会員の皆様からお寄せいただいたご活躍の情報を学会のウェブサイトに掲載しております。アドレスは以下のとおりです。

<http://www.asle-japan.org/publications/会員による出版物/>

今後も定期的に情報の更新をしてゆきますので、皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の塚田幸光(hiro2827★gmail.com)までお送り下さい。次回の更新は2017年11月ごろを予定いたしておりますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。これまでに情報をお寄せ下さっている先生方は、どうぞ新しい情報のみをご連絡下さい。できるだけ多くの方々からのご連絡をお待ちしております。どうぞよろしくお願ひいたします。

ASLE-J 広報委員 喜納育江、塚田幸光、松永京子

## ..... 編集後記 .....

ニューズレター第42号が完成しました。今号も巻頭言、国際学会の報告、中国の研究所の紹介、著書紹介など盛りだくさんで、もちろん今年の夏の大会の魅力を語る案内も掲載しています。著書紹介は、今後重要性を増しそうな学問領域の先駆的著作『環境人文学Ⅰ・Ⅱ』です。編著者だけでなく多くのASLE-J会員がこの2冊に執筆しています。

今号の紙面の特徴は、アジア圏での環境文学研究が着実に歩みを進めていること、新たな力が伸びやかに成長していることでしょうか。シリーズエッセイ「風景のカタチ」にはアメリカ留学中の大学院生がすてきな文を寄稿してくれ、院生組織の積極的な読書会活動も期待大です。

私事になりますが、私はちょうど前回の東京開催の大会(於白百合女子大学)からニューズレターの編集に関わるようになり、今回で2期4年の編集委員の任期を終えます。白百合女子大で某大先生の一声でさっと記事が集まったことが懐かしく思い出されます。ニューズレターを通して、毎年の大会、ASLE-USとISLE-EAをはじめとする国際学会の様子、会員の皆様の近況など、真っ先に鮮度の高い原稿が読めるのは役得で楽しいものでした。編集はチームワークなのですが、とりわけ遅れることなく制作できたのは緻密なスケジュール管理と組版を担当して頂いた同任期の編集委員のおかげです。この編集後記は文字通り「後記」で、梅雨入りしたというのに関西ではまったく雨がふらず暑い日に執筆しています。4年間の感謝をこめて!

(C・A)



## 【発行】

代表 結城正美  
事務局 長岡技術科学大学 高橋綾子  
〒940-2188  
新潟県長岡市上富岡町1603-1  
Tel/Fax: 0258-47-9805 (直通)  
E-mail: tayako★vos.nagaokaut.ac.jp

## 【編集】

編集代表 千里金蘭大学 浅井千晶  
〒565-0873  
大阪府吹田市藤白台5-25-1  
Tel: 06-6872-7945 (直通)  
Email: c-asai★cs.kinran.ac.jp